

シューマンの音楽批評における演出としてのダヴィッド同盟

——『新音楽時報』と『音楽と音楽家』の比較を通して

永井文音 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科（音楽学領域）

要旨

ロベルト・シューマン Robert Schumann (1810-1856) は、作曲家であると同時に、音楽新聞『新音楽時報 Neue Zeitschrift für Musik』を創刊した音楽批評家でもある。彼は 1834 年に同新聞を創刊し、その 10 年後に引退するまで、記事の執筆者としてはもちろん、新聞の編集長としての職務も果たした。

『新音楽時報』でシューマンが執筆した記事は、彼自身の手によって抜粋・編集され、1854 年に著作集『音楽と音楽家 Gesammelte Schriften über Musik und Musiker』として出版された。この著作集は、抜粋版という特性からか、これまで研究対象として注目されることがほとんどなかった。シューマンの批評活動についての先行研究では、原典である『新音楽時報』のみが研究対象として扱われ、シューマンの伝記のなかでも『音楽と音楽家』についてはほとんど触れられず、出版年などの基本的な情報がまとめられるに留まっている。

しかし、実際に『新音楽時報』と『音楽と音楽家』を比較してみると、記事の順番や本文中の表現などに、いくつかの修正があることがわかる。すでに述べた通り、シューマンは『音楽と音楽家』の出版に当たって、みずから編集作業をおこなっていたため、それぞれの変更点には彼の意図が反映されていると考えられる。

本論文は、『新音楽時報』と『音楽と音楽家』の間にあるちがいを分析することで、批評家であり編集者でもあったシューマンの戦略を明らかにすることを目的としている。なお、考察の際には、彼の特色がもっとも色濃くあらわれている「ダヴィッド同盟 Davidsbündler」による記事を中心に扱う。

論文全体は全 3 章から成っている。

第 1 章では、『新音楽時報』と『音楽と音楽家』の成立過程について概観した。シューマンは『新音楽時報』で書いた記事をみずから抜粋・編集し、1854 年に『音楽と音楽家』を出版した。本書の出版をめぐるシューマンと出版社との

やりとりについては、書簡集に未収録の手紙を引用しながら整理した。手紙からは、シューマンが出版までに多数の相手と交渉を重ねていたことが読みとれ、著作集出版に対する彼の強い思い入れがうかがえる。

第2章では、『新音楽時報』と『音楽と音楽家』の収録内容について比較をおこなった。『音楽と音楽家』には、シューマンが『新音楽時報』で執筆した344記事のうち、271記事が収録されている。『音楽と音楽家』の前書きのなかには、文章が「『新音楽時報』で掲載した」年代順に編集されている」という記述がみられるが、実際に両者を比較してみると、ところどころで本来とは異なる並び順があらわれるという結果になっている。くわえて、ダヴィッド同盟関連の記事にかんしては、上述の事情とは無関係の並び替えがおこなわれていることがわかった。

第3章では、ダヴィッド同盟による記事の精査をおこない、特に第2節では『新音楽時報』と『音楽と音楽家』の間にある相違点に注目することで、シューマンの戦略について考察した。

シューマンは、ダヴィッド同盟、特にオイゼビウスとフロレスタンの視点を借りることで、自身の複雑に絡まりあった意見をわかりやすく伝えることを狙っていた。それと同時にダヴィッド同盟は、『新音楽時報』に対する読者の興味を惹くための一種の演出でもあった。シューマンは『新音楽時報』において、彼らを実在する団体のように扱い、その正体（つまり、架空の存在であること）については長らく明かさなかった。友人ツッカルマリオに宛てた当時の手紙からは、シューマンがこうした試みを戦略的におこなっていたことが読みとれる。対して『音楽と音楽家』では、媒体が音楽新聞から著作集に移ったことを意識してか、ダヴィッド同盟の正体は前書きの時点で明かされてしまっている。第2章で触れた記事の順番の変更や、本文内の修正・カットは、同盟の役割のちがいが反映された結果としてあらわれたものである。

シューマンの批評文は、ダヴィッド同盟によるものをはじめとして、その革新性や詩的な面が目立つ。さらに、こうした傾向はシューマンの気質や文学の趣味と結び付けられることが多い。しかし本研究での考察からは、シューマンが「読者に気に入ってもらおう」という明確な意図を持ったうえで、ダヴィッド同盟を演出として利用していたことが明らかになった。